

第4回目 テーマ

老いて亡くなることが わかっている、 受け入れられません。

今回の話し合いの目的は、健康で平穏な生活のなかでは目をそむけがちな「死ぬこと」に向きあっていたり、死んでしまったこと。その意味では熱心に話し合いが行われ、なかには厳しい体験を語っていたり、なか方もみえたことは、本当にありがたいことでした。

（裏面へ）

善教寺 穂積致章



連研だより

第11期

季節が少しづつ寒さを感ずるようになってきました。体調管理！

発行責任者

員弁組連研部会長

蓮成寺 藤田智善

発行年月日

二〇一七年十一月



今月の仏事作法

今月の仏事作法は、基本作法1として、**合掌・礼拝の仕方**を行いました。礼拝は「ライハイ」と読んでください。

今月のポイント

・**日常勤行聖典**の百三十四項を参照にしてください。

・**合掌**してお念仏をひと息ほど声に出して礼拝します。

・**礼拝**は、四十五度ほど腰から傾けることを意識してもらえると美しい姿勢に見えます。

いつも意識して下さい。

連絡事項

11月

アンケートにご協力ください

- 1 用紙を自宅で記入して下さい。
- 2 12月の連研で回収します。
- 3 質問事項は1月にお答えします。

回収日

12月
連研開講日

第4回 まとめ

告知も延命治療も、現実にはさまざまなケースがあります。特に延命治療は、点滴をするか、するならば治療の点滴か栄養点滴か、点滴用カテーテルを挿入するか、胃ろうをするかなどそれぞれの段階で決断が求められます。医療者との丁寧な相談が必要です。

ただ、がんの告知と余命宣告は、末期であっても基本的には行う方向です。最大の理由は、最後まで治療を続けるのか、治療はやめて緩和ケアをすることによって生活の質を高めるか、決めなければならぬからです。

しかし、緩和ケアに移行する場合、本人が「死を受け入れる」ことが必要になります。受け入れられそうもない場合は、余命宣告をやめて、生きる希望を与えて治療を続ける以外に道はありません。

動物は死期が近づくと、死を受け入れるように本能が命じます。しかし、賢すぎて本能が壊れた人間は、そのままでは最後まで生きる欲望が強く、死を受け入れることができません。

最後は死を受け入れて、穏やかに死を迎えるためにはどうしたらよいか、そのひとつの試みとして、余命宣告の予行演習を提案しました。

医師の余命宣告は正確ではありません。実際には、自分でここまででは生きよう、その間にすべきことを考える、という自己決定が大事になってきます。

それならば、今健康な時に余命を仮に設定して、「死を受け入れて」生きること考える予行演習は、重要な意味を持つこととなります。

もちろん、10年の余命と思っていたのに、来年初突然病気が発覚し余命1年ということもあります。私がそうになったら、予行は何のことだというほどあわてふためくことでしょうか。でも、たとえ役に立たなくても、意識することは大事だと思えます。

「死を受け入れて」生きねばならなくなると、何ができるかと考える時、そのヒントは、死から生を学ぶ仏教のなかに、必ず見つかると思います。ぜひこの機会に、仏教への関わりを深めていただきたいと思います。

話し合いの主な意見

◎がん告知を受けた方、脳梗塞で余命宣告から回復した方、救命センターに入院経験のある方、若い親族・友人を送った方など貴重なお話をいただき深く感謝します

①死のことを考えたことがあるか。
※考えたくない・死を意識したが前向きに生きていきたい。
まだ死ねない。

※ある・エンディングノートを書いた
※寺に参る機会が増えた。
※多くの親族を送って何となく受け入れるようになった。

②告知と余命宣告について希望するか
※はい「がややく多く
はい「できる」とはしたい
隠す方もつらい

※「いえ・わからない」はほぼ同数
いいえ「普通でいられる自信がない
自殺者もいた。
※あつて当然という意見もある

③余命宣告期間の希望
※知るなら正確に教えてほしいが多数
※セカンドオピニオンも聞きたい。
④延命治療の希望 ほぼ全員が希望しない。

※生きている間にまわりに忘れられたくない
※本人も、してあげる側もはたして幸せなのか。家族で話し合っている。
経済的負担も考える必要。

⑤死の不安を引き受けて生きる「こと」についてどう思うか。その他
※身体的苦痛の程度により変わる。
※自然の流れでいきたらう。
※余命宣告を受けたが、3年もあるとらえ、感謝の心で前向きに生きた方がいた。
※連研に参加したから「その話題だった。